九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.355

2021(令和3)年 2月 2日(火)発行

◆2月2日は"節分"。追い払われる鬼ですが、鬼は妖怪や死霊と違って、人間と同様に喜怒哀楽をもち可愛らしいところもありますね◆鬼が出入りするのは「鬼門」で東北(丑寅うしとら)の方角ですが、そこから鬼のイメージとして牛と虎の特徴の角や牙、虎の皮のふんどしなどが考えられたそうです◆節分の日玄関に「柊鰯ひいらぎいわし」・「焼嗅やきかがし・やつかがし」を飾ったりします。

東日本大震災から10年 ② 大震災・原発事故への"思い"1

○大震災や原発事故を直接体験した私たち南相馬市民ですが、会員さんの思いをほんのひとこと、綴っていただきました。

二度と見たくない孫の困惑した顔

原町区国見町　角田靖夫さん

震災と原発事故から10年。2011年3月11日は、「不条理」という言葉でも表現出来ない程の最悪な日になりました。その日の夜は直ぐに逃げられるように、枕元に靴を置きました。

それから放射能を恐れ、山形県と郡山市に長女夫婦と避難した4年近くは、地に足のつかない日々でした。その当時小学生であった孫の何が起きているのか困惑していた顔は、二度と見たくありません。

私は時の政権が私達市民に寄り添い、「原発ゼロ」を未来に担う子や孫の為に、早期に実現して欲しいと願うばかりです。

穏やかな姉の「原発に絶対反対！」

原町区上町　鈴木妙子さん

昨秋89歳で亡くなった姉の言葉が忘れられません。もう55年前の1966年のこと。「これからの電力供給の為、この地に安心安全の原発を」のスローガンに、周りの誰もが疑念を抱かなかった原発の建設に、日頃穏やかな姉が「私は原発に絶対反対！ここに原発を作ってはいけない！！」ときっぱり断言したのです。

今、トラブルを解決する備えを持たない33基の原発に再稼働の動きがありますが、私達が受けたこの苦しみを、どの地の誰にも与える事を許してはいけないのです。

家族で避難を決めたあの朝、無言で唇をかみしめた姉の横顔を忘れる事ができません。

震災から10年となる今、人々の生業の中に、心に残るこの深い傷跡が、少しずつでも癒される事を祈る、今日の思いです。

避難を前提にしたエネルギー政策は間違い 安全と幸せが前提であるべきだ

原町区大甕　桜井勝延さん

2011年3月11日の大震災の大津波で636人が亡くなり、東電福島第一原発の爆発事故による避難で517人が震災関連死と認定された。これほどの多くの命が失われたのだ。

10年を迎えても原発事故の影響が続いている。20キロ圏内の小高区と原町区の一部での人口減少は著しく、当時の35%ほどだ。南相馬市の居住人口は2万人ほど減少し、高齢化率は26%から35%になった。原発事故が原因だ。

原発事故で一時的に6万人以上が避難を余儀なくされた。放射能による健康不安で南相馬市に帰還しない市民の大半は子育て世代、働く世代だ。

ところが、国は原発事故後も薩摩川内原発を始め他の原発を再稼働させたり、再稼働を目指している。再稼働の条件の一つは避難計画を作ること。10年前の事故の時、南相馬市に避難計画はなかったが、もしも計画があったらスムーズに避難できて多くの命を救えたのか？

そもそも避難を前提にしたエネルギー政策は間違いであるし、馬鹿馬鹿しい！エネルギー政策は安全と幸せを前提にあるべきである。

「原発」は「核発電所」と言うべきです

原町区　Kさん(匿名希望)

私たち家族も原発事故で関東に避難し、今は戻って生活しています。市内の詩人若松丈太郎さんは本でもお話でも、「原子力発電所は核発電所と言うべきだ」と主張していますが、私も本当にそうだと思います。平和利用で「原子力」とごまかしてきましたが、事故が起き原発も核兵器と同じで制御できない恐ろしいものと暴露されました。

東日本大震災から10年②　大震災・原発事故への“思い”2

貧困な国の時間

原町区大町　二階堂憲宏さん

3.11から10年という時間が流れたが、かつても今も、この国家は人の命を≪本当に救いたい≫と思ったことはなかった。

水俣であれ、東日本大震災であれ、原発の大惨事であれ、すべて利権と経済が最優先の基本方針として貫かれている。この1年にわたる新型コロナの悲惨さもそうだ。

これらが自然の法則ではなく、僕たちの社会制度【エネルギー政策や公衆衛生政策など】の貧困によって、大半が引き起こされているとしたら（僕はそう考えているが）、この国自体を見直さなければならないだろう。

あの日を忘れない

原町区国見町　大槻千鶴子さん

3.11午後2時46分、私は南相馬市立病院のベットから起き上がろうとした時に大きな揺れを感じました。その3日前に子宮がんの手術をしたばかりで、まだ抜糸もしていない。

やがて津波情報が流れ病院内は大騒ぎ。消防署の広報車が津波に警戒するようにと町内を回っていました。その頃1階のフロアーでは職員の方達が重たいイスを片付けて、床にマットを敷いて被災者を受け入れる準備にかけ回っていました。

夜になって一人の女子中学生が私の病室に、医者の白衣に包まれて連れてこられた。見ると右手の中指が途中から切断されて無くなっていました。話をきいてもみると、卒業式が終わって家で休んでいる時に家が揺れて机の下にもぐったりして様子を見ていたが、しばらくして津波だという声に慌てて外に出た。すると真っ黒い波にのまれて気が付くと近くの木につかまっていた。波が引くのを待っていたら、消防署の人に助けられた。その時はもう中指が無くて血も出ていなかったそうです。それから両親に電話しても全然連絡もなく市のほうで児童施設にお願いしたようです。

12日、小高病院の患者さんたちが市立病院に避難してきて病室を移動したり、看護師さん達は大変でした。

13日、朝から病室の窓にテープで目張りをしているので、もしや原発事故ではないかと不安になりました。担当医が来て「一日早いけど抜糸して退院してください」と言われました。また、予定日がきても出産の気配のない妊婦さんが、県立医大に転院するはずが原発事故のため急遽帝王切開で無事に男の子を出産したそうです。

14日の早朝、原発が爆発してすぐに避難準備をしました。でも、津波の被害にあい、両親の安否も分からずそのまま避難しなければならない人達の心情を思うと、何の被害もなく我先に避難する後ろめたさがありました。多少なりとも放射能の知識があったので、取りあえず車で家族4人自宅を離れ福島市方面へ向かいました。

ところが、南相馬市から福島市に向かう道沿いはちょうど風の通り道になっていて、飯舘村などは高汚染地区になり、福島市の方も南相馬市より放射線量が高かったのです。振り返ると私たちは放射線量が高い方へ避難してきたわけです。地震や津波への対策の不備を多くの専門家に指摘されても無視してきた東電の傲慢さと、それを容認してきた政府の無責任さには憤りを感じます。

考え直すことを求められている

私は、1945年8月15日の終戦の時、国民学校の2年生でした。3月10日の東京大空襲の時には神奈川県の逗子市に住んでいたので空襲は免れたのですが、東京の空が赤く染まっていたことは鮮明に記憶しています。戦時中、不気味なサイレンが連日鳴り響き、人々は風呂にも入れず食事も満足に食べられない、夜は寝入りばなを叩き起こされるので洋服を着たまま横になる、毎日が恐怖の連続でした。8月6日には広島、9日には長崎に原爆が投下されて、一瞬のうちに尊い命と多くの財産を失って、今なお被爆者の傷は癒えていません。

私の80年の人生は、第二次世界大戦をはじめいつも世界のどこかで核実験や国どうしの争いが絶えず、核兵器がいつ使われるかわからない状況が続いています。原発反対の声を上げて同じ仲間と集会に参加していましたが、残念ながら継続しなかったことが悔やまれます。

安全神話に踊らされ反対の声も上げずに暮らしていた私は、被害者それとも加害者か。人はもっと謙虚になって、自然と折り合いをつけながらどう生きるべきかを、この機会に考え直すことを求められているのだと私は思います。

◎大震災・原発事故直後の状況や被災体験40名分は、『九条はらまち』のNo.164（2011．6．11発行）～255（2015．1．17発行）にも掲載されています。≪インターネット　はらまち九条の会　検索≫
≪『九条はらまち・集録その2』≫をどうぞ。10年も経つのに、つい昨日のことのようです。